Ensemble Dimanche

アンサンブル ディマンシュ

第 85 回演奏会

2019 年 9 月 22 日(日)

タワーホール船堀　大ホール

【プログラム】

シューベルト　イタリア風序曲第 1 番　二長調　D590

モーツァルト　交響曲第 35 番　二長調　K.385「ハフナー」

第 1 楽章:Allegro con spirito
第 2 楽章:Andante
第 3 楽章:Menuetto
第 4 楽章:Presto

♪ 休憩 ♪

ベートーヴェン　交響曲第 2 番　二長調　Op.36

第 1 楽章:Adagio molto - Allegro con brio
第 2 楽章:Larghetto
第 3 楽章:Scherzo
第 4 楽章:Allegro molto

【プロフィール】

指揮　澤村杏太朗

東京藝術大学指揮科を首席卒業。卒業時にアカンサス音楽賞、同声会賞、若杉弘メモリアル基金賞を受賞。

指揮を三河正典、高関健、山下一史の各氏に師事。また、尾高忠明、下野竜也、ダグラス・ボストック、沼尻竜典、山田和樹、リッカルド・ムーティらのマスタークラスにおいて研鑽を積む。これまでに、東京フィルハーモニー交響楽団、大阪交響楽団、東京ニューシティ管弦楽団と共演。オペラの分野でも精力的に活動し、「カルメン」「椿姫」など 10 以上の作品を指揮。

今シーズンより新国立劇場に副指揮者として勤務している。

【曲目解説】

～作曲家自身による曲の「転用」～

今回は、作曲家自身によって転用された曲を集めてみました。「転用」と一口で言っても、タイトルのみ差し替えて再利用する（使い回し）、一部を利用し別な曲にする（改作）、楽章構成や楽器編成などを変えて別のジャンルの曲にする（改編）など様々です。いずれにしても、作曲家が自身の曲を転用するのは、その曲に愛着があるからにほかならないでしょう。

余談ですが、今回の曲の調性はすべてニ長調で統一されています。

◆シューベルト：イタリア風序曲第1番ニ長調　D590

～「ロザムンデ」序曲に転用された序曲

シューベルトは 1817 年(20 歳の時)に「イタリア風序曲」という演奏会用の序曲を2曲残しています。「イタリア風序曲」と言うと、普通は急―緩―急の三部から成るバロック時代の序曲の形式を思い浮かべますが、この序曲はそのような形式ではなく、当時ウィーンで流行していたイタリアの作曲家・ロッシーニの序曲に準えたという意味での「イタリア風」のようです。この第1番は、特に序奏とコーダの旋律や伴奏形態が自作の「ロザムンデ」序曲 op.26 によく似ていることから、「ロザムンデ」序曲はこの曲を転用（改作）して作られたとものと思われます。

しかし、話は少々複雑です。この「ロザムンデ」序曲、実は自身の歌劇「魔法の竪琴」(1820 年)の序曲で、劇附随音楽「ロザムンデ」の序曲として書かれたものではありません。また、シューベルトは、1823 年の舞台劇「ロザムンデ」の初公演に際し、序曲が間に合わなかったことから以前に書いた歌劇の序曲をそのまま転用（使い回し）しているのですが、この時使われたのは「アルフォンソとエストレッラ」(1822 年)という歌劇の序曲で、「魔法の竪琴」序曲ではありません。つまり「アルフォンソ」序曲こそが本来の「ロザムンデ」序曲で、「ロザムンデ」序曲と呼ばれている曲（本来は「魔法の竪琴」序曲）は舞台劇「ロザムンデ」とは全く関係がないということです。

それでは、なぜ「魔法の竪琴」序曲が「ロザムンデ」序曲の座に就いてしまったのでしょうか。「ロ

ザムンデ」の劇の上演は2回で打ち切られ、シューベルトの劇音楽もその後出版されることなく、しばらく忘れ去られていました。この劇音楽を含むシューベルトの複数の草稿がシューマンによって発見され、その後出版されたのは、彼の死後 60 年以上も経った 1891 年です。この年には歌劇「魔法の竪琴」も出版されていますが、そのときに混乱が生じたと考えられます。一説によると、「魔法の竪琴」序曲の自筆の草稿に、シューベルト以外の何者かによって「ロザムンデ op.26」という書き込みがあったためだと言われています。この書き込みが意図的なのか、単なる間違いなのかはミステリーです。

◆モーツァルト：交響曲第 35 番ニ長調　K.385a「ハフナー」

～セレナーデから転用された交響曲

この交響曲の標題となっている「ハフナー」は、モーツァルトと同い年で幼い頃から親交があり、後に貴族となったジークムント・ハフナーⅡ世に由来しています。モーツァルトは、このハフナー家のために 1776 年と 1782 年にそれぞれセレナーデを作曲しています。このうち 1782 年のものは六つの楽章から成るものですが、モーツァルトは、翌年この曲の二つの楽章（メヌエットと行進曲）を省いて四楽章にし、さらに第１楽章と第４楽章にフルートとクラリネットを加えて交響曲に転用（改編）しています。原曲のセレナーデは、一部楽章の草稿が紛失していて体をなしてはいませんが、改編の際省かれた行進曲は三つの行進曲 K.408 の第 2 曲だとされています。

1776 年に書かれたもう一つのセレナーデは、八つの楽章から成り、現在でもセレナーデ第７番ニ長調 K.250、通称「ハフナー・セレナーデ」として残されています。ヴァイオリン独奏を伴った第４楽章「ロンド」は、単独でもよく演奏され、ヴァイオリンの練習曲としても有名な曲です。「ハフナー・セレナーデ」という通称から、この曲をハフナー交響曲の原曲だと思っている方がいるかもしれませんが、両者は関係ありません。モーツァルトは、この曲も独奏のある楽章を除いて五楽章の交響曲に改編していますが、この交響曲は長らく忘れ去られていました。魅力ある独奏曲を省いたことに問題があるようですが、近年この交響曲は新全集に楽譜が収められ、演奏録音もされました。

モーツァルトにとってセレナーデの交響曲改編は珍しいことではなく、このほかにも数曲が試みられています。

◆ベートーヴェン：交響曲第２番ニ長調　op.36

～ピアノ三重奏曲に転用された交響曲

ベートーヴェンは 1800 年に交響曲第１番を完成させますが、それに続いて第２番を 1802 年に完成させました。構想自体は第１番作曲中に持っていたようです。第１番同様ハイドンやモーツァルトの影響は否めませんが、第１番ではできなかった独自性を多く打ち出しています。管弦楽法では、当時オーケストラの新参者として冷遇されていたクラリネットを多用したり、それまで同じパートとして書かれていたチェロとコントラバスを独立して扱ったりしています。また、交響曲の第３楽章は「メヌエット」が通例でしたが、初めて「スケルツォ」と標記するなど、列挙しても余りあります。

とは言え、この曲は若さ溢れる明るい交響曲にも関わらず、彼の交響曲の中での人気度では常に下位にランキングされ、どちらかというと、第１番と次の第３番「英雄」という巨人の間に隠れる地味な曲として扱われています。次男というのはどの世界でもそのような憂き目に遭ってしまうのでしょう。ただ、その中でも緩徐楽章（第２楽章）はその美しさが随一と高く評価されています。

ベートーヴェン自身はこの曲を好んでいたようで、1805 年にピアノ三重奏曲に転用（改編）しています。このピアノ三重奏曲には通し番号は付けられていませんが、作曲時期は第４番(1798)と第５番(1808)の間で、ピアノ三重奏曲としては絶頂期に当たります。交響曲全楽章が作曲家自身によってピアノ曲以外に編曲されることはきわめて稀なことで、もちろんベートーヴェンの交響曲でもこの曲だけです。転用の理由は定かではありませんが、一説によると、当時のオーケストラの演奏会は上流階級のためのもので、庶民には高嶺の花だったため、手軽に家庭で演奏会を開きこの交響曲を広めたかったからだと言われています。とすれば、やはりベートーヴェンはこの曲に愛着があり、自身のランキングでは上位であったのかもしれません。

【第 85 回メンバー】

第 1 ヴァイオリン	久津見眞理、三瓶政一、寺西　丕、☆時山響子、西川富之、西村　実、本山まり子
第 2 ヴァイオリン	石嶺寿子、関根佳子、中村文樹、林　俊夫、望月あゆみ、♪森　未知
ヴィオラ	柴野かおり、下山純也、♪関口孝司郎、千秋和久、山口　彰
チェロ	工内智恵、中山憲一、三次摂子、♪米倉俊郎
コントラバス	江川博之、♪須賀敬亮
フルート	谷口玲子、徳植俊之
オーボエ	市川亜理、山口高司
クラリネット	鈴木千暁、中嶋智子
ファゴット	越島康太郎、星野未央
ホルン	大高奈穂子奈穂子尾形武一、町田明子
トランペット	鴨狩公一、薗部晴信
ティンパニ	星野武徳
	☆：コンサートマスター、♪：弦楽トップ
練習指揮	山上孝秋
トレーナー	戸澤哲夫（東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団コンサートマスター）

♪ 次回の演奏会ご案内 ♪

日時：2020 年 2 月 15 日（日）午後
場所：府中の森芸術劇場　ウィーンホール
指揮：平川 範幸
曲目：エーベルル：交響曲 変ホ長調　op.33
　　ベートーヴェン：交響曲第３番「英雄」　op.55　ほか

詳細は HP　http://www.e-dimanche.jp/　をご覧ください。
※招待券ご希望の方はアンケートにご記入いただくか HP よりお申込みください。

Schubert

Alphonso und Estrella
Ouverture
op. 69

本日のアンコールについて

本日のアンコールは、

シューベルト：
歌劇「アルフォンソとエストレッラ」序曲

でした。

本演奏会プログラムの曲目解説にあるとおり、
舞台劇「ロザムンデ」の初演時にその序曲として
転用（使い回し）された曲、すなわち本物の
「ロザムンデ」序曲です。